

大島高任の洋式高炉の建設と柳田國男『遠野物語』の山人

岩 本 由 輝

キーワード…砂鉄 岩鉄 餅鉄 鉄錢 密錢

一 『遠野物語』における山男・山女などの出現地点

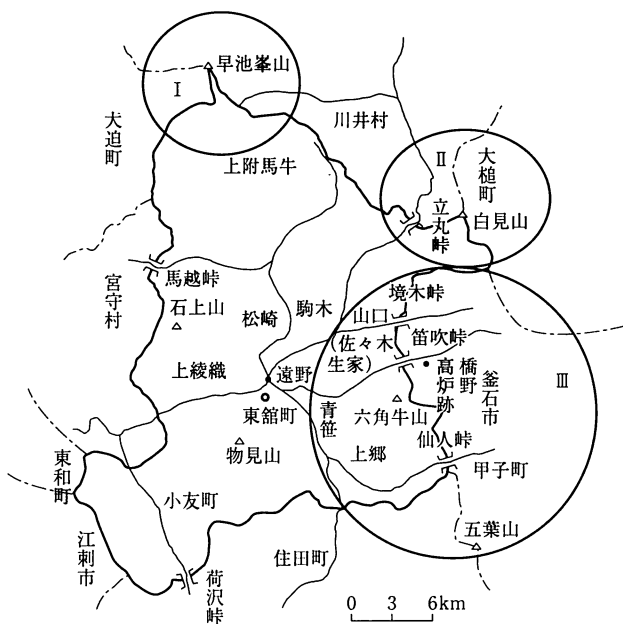
遠野郷出身の佐々木喜善を話者とする柳田國男の『遠野物語』『遠野物語拾遺』、それと関連する、やはり遠野郷出身の伊能嘉矩の『遠野のくさぐさ』における山男・山女などの出現地点をみて行くと、第1図に示すごとく、北の方から、

I 早池峰山・葉師岳をめぐる一帯

II 白見山をめぐる一帯

III 六角牛山・仙磐山・五葉山・界木峠・笛吹峠・仙人峠をめぐる一帯

の三つに区分できる。いずれも現遠野市の縁辺部であり、Iは稗貫郡大迫町・下閉伊郡川井村に、IIは下閉伊郡大槌町に、IIIは釜石市に重なっている。そうなれば、大迫町・川井村・大槌町・釜石市からみても、その縁辺部にあたるI、II、IIIにも山男・山女などの出現の記録があつてよいはずである。事実、『遠野物語』『遠野物語拾遺』『遠野のくさぐさ』には、大迫町・川井村・大槌町・釜石市にかかわる話も出てくるのである。したがって、『遠野物語』『遠野物語拾遺』『遠野の



第1図 遠野市略図 I・II・IIIは『遠野物語』『遠野物語拾遺』などで山男・山女の出現地点の集中している一帯

くさぐさ』は、遠野郷のなかだけで完結させてみることはできず、その反対側から遠野郷をのぞいてみる必要がある。なぜなら、遠野郷は決して閉鎖された世界ではないからである。それにもかかわらず、『遠野物語』は、その大ききのゆえに、遠野郷をかえって閉鎖された世界にってしまったている。

このような視点に立って『大迫町史』『川井村史』『大槌町史』『釜石市史』などの伝説や昔話の項をみても、山男・山女などに関する話は出て来ず、これら市町村の縁辺部である遠野郷に接するあたりにおいても、『遠野物語』『遠野物語拾遺』『遠野のくさぐさ』における山男・山女などに対応する話はまったくみられない。これは一体、何を意味するかを、本稿では考えて行くことにする。

まず、Iの一帯については、つぎのような話がある。『遠野物語』第二八話 早池峰山にいたる山路をつけていた附馬牛（現遠野市）の猟師が、山中で餅の大好きな「大なる坊主」に遭遇した（『柳田國男全集』以下、『全集』と略記）第二巻、筑摩書房、一九九七年一〇月、二三頁）。

『遠野物語』第二九話 「天狗住めり」、という鶏頭山（前薬師）の頂上で、山口（現遠野市）のハネトという家の主人が、あまたの金銀をひろげている「大男三人」に遭遇した（『全集』第二巻、二三～四頁）。

『遠野物語』第三〇話 早池峰山に竹を伐りに行った小国村（現川井村）の某が、「大なる男」がいびきをかいて寝

ている側に、「地竹にて編みたる三尺ばかりの草履を脱ぎてあ」るのをみた（『全集』第二卷、二四頁）。

- ・『遠野物語拾遺』第一〇六話 一九一三（大正二）年の冬頃、土淵村栃内和野（現遠野市）の狩人菊池栄作が、早池峰山に近い大出山中で、「牧場小屋へ行」という「麻のムジリを着て、藤蔓で編んだ鞆を下げ」た「一人の男」に遭遇した（『全集』第二卷、一〇八―九頁）。

- ・『遠野のくさぐさ・第一束』第五〇話 「昔より山男住めり」という伝承のある早池峰山の前麓「薬師山」に「山男」が現われ、「単独にて早池峰に登山する人」に酒を強請したので、飯をやらうとすると、飯はいらないといい、「山の奥へ隠れ去りしこと」があつた（谷川健一編『遠野の民俗と歴史』へ以下、『民俗と歴史』と略記）三―書房、一九四一年一〇月、四八頁）。

また、IIの一带については、つぎのような話がある。

- ・『遠野物語』第三三話 茸とりに行った人が、「白望の山奥にて金の樋と金の杓とを見」つけたが、持ち帰ることができなかつたので、側の木の皮を白くして葉にして帰り、翌日、人々と一緒に行つてみたら、葉ともども見つけることができなかった（『全集』第二卷、二四頁）。

- ・『遠野物語』第三五話 喜善の祖父の弟が白望の山で、夜、「谷を隔てたるあなたの大なる森林の前を横ぎりて、女の走り行くのを見た」が、そのさまは「中空を走るやうに思は」れ、「待てちゃアと二声ばかり」叫ぶのを聞いている（『全集』第二卷、二五頁）。

- ・『遠野物語拾遺』第一一五話 金沢村（現大槌町）の老狩人が、一九一三（大正二）年秋に、白見山に狩に行き、夜になって帰ろうとしたとき、「突然前に蠟燭が三本、ほとほと燃えて現は」れたので、「立止つて見て居ると、其三本が次第に寄り合つてふつと一本になり、焰が稍太く燃え立」ち、「其火の穂から髪を乱した女の顔が現は」れ、「薄気味悪く笑つた」（『全集』第二卷、一二二頁）。

- ・『遠野物語』第三話 栃内村和野（現遠野市）の佐々木嘉右衛門が、若い頃、白望山と思える山奥で、「遙かなる岩

の上に美しき女一人」「長き黒髪を梳りて居る」をみたが、その女の「顔の色極めて白し」という（『全集』第二巻、一五頁）。

・『遠野物語』第六三話 小国村（現川井村）一番の金持三浦某という家が、貧しかった二、三代前の頃、少々魯鈍なその家の妻が門前を流れる小川に沿って白望山の麓と思える山中に路を採りに行ったところ、マヨヒガに遭遇し、山男の家かと思い、恐しくなつて帰つて来たが、ある日、門前の小川で米を研いでいると、上流から赤い碗が流れてきたので拾い、ケセネギツのケセネを量る器として使つたところ、いつまでもケセネが尽きず、三浦家は豊かになつた（『全集』第二巻、三二―三頁）。

・『遠野物語』第六四話 金沢村（現大槌町）から栃内村（現遠野市）の山崎家の娘輦となつた男が、金沢村の実家に帰るとき、白望山中でマヨヒガをみたが、あとで大勢で行つてみると、マヨヒガは見つからなかつた（『全集』第二巻、三二―三頁）。

・『遠野物語』第三四話 白望の山続きの離森の長者屋敷（現遠野市）という「無人の境」に炭焼きに行った者が、夜、小屋に泊つてゐるとき、「髪を二つに分けて垂れたる女」が「小屋の垂孤をかゝけて、内を覗ふ」のをみた（『全集』第二巻、二四頁）。

・『遠野物語』第七五話 同じ離森の長者屋敷（現遠野市）に開かれたマッチの軸木工場の戸口に、夜になると、「伺ひ寄りて人を見てあげた笑ふ」女があり、工場を山口（現遠野市）に移してから、鉄道枕木の伐り出し人夫が女に「何処へか連れ出」され、「帰りて後は二日も三日も物を覚えずと云」うことがあつた（『全集』第二巻、三六頁）。

・『遠野物語』第七六話 やはり長者屋敷（現遠野市）近くの長者の家で、糠を捨てたことからできたという糠塚と呼ばれる山に、「鉄を吹きたる滓」が出て来るが、「この長者は昔の金山師なりしならんか」といわれた（『全集』第二巻、三六頁）。

・『遠野物語拾遺』第一〇三話 土淵村山口（現遠野市）の火石の浜歩きの高宮勘之助が、ある日、大槌浜（現大槌町）から魚を運んで帰る途中、白望山麓の山落場というところで、「谷間の僅かの平に一面に菰莖を敷き拡げて干してあつた」のを見つけ、行ってみると、それらは「もう何者か取り片附けた後で、一枚も無かつた」（『全集』第二卷、一〇八頁）。

・『遠野物語拾遺』第一一六話 土淵村野崎（現遠野市）の前川勘左衛門が同じ山落場に萱刈りに行き、小屋掛けして泊つて居たところ、小屋のすぐ後から「年寄の声で、ひどく大きくあはゝと二度まで笑」うのを聞いたとか、「女の髪の毛の赤い抜毛が丸めて落ちて居るのを見た」という（『全集』第二卷、一一二頁）。

・『遠野のくさぐさ・第一束』第五二話 大白見という白見山（現遠野市と現大槌町の境）の中部の大沼あたりには、「昔より山男住居すと云ひ伝」え、「マダの木皮にて製せし大きな草鞋を穿ちて往来す」というが、山男には一身三頭のミツヤマと、一身四頭のヨツヤマがあり、ミツヤマは獵師が安全を守るために張る幸繩の内側に入ることをいやがるといふ（『歴史と民俗』四八〜九頁）。

・『遠野物語拾遺』第一一一話 栗橋村（現釜石市）アカスバの狩人某が白見山で雨のなか霧にまかれ、深い谷に落ちたとき、「向うから髪をおどろに振り乱した女がやつて来るのに逢つた」が、「着物は完くちぎれ裂け、素足」で、「鉄砲をさし向けると、ただ笑ふばかり」、そのうちに「飛ぶように駆け出した」という（『全集』第二卷、一一〇〜一一頁）。

・『遠野物語拾遺』第一一七話 野崎（現遠野市）の佐々木長九郎が白見山に入り、小屋を掛けて泊つていたとき、「洞一つ隔てたあたりで頻りに木を伐る音が聞え、やがて倒れる響がした」ので、恐ろしくなり、帰ろうとすると、「待てえと引裂く様な声で何ものかゝ叫んだ」という（『全集』第二卷、一一二〜一三頁）。

・『遠野物語拾遺』第一二〇話 土淵村（現遠野市）の獵師政吉爺が白見山麓の琴畑（現遠野市）の奥のガログチで、岩の上に登り、シカオキを吹いていると、「不意に後から突飛ばされた」が、「此辺は昔から山男や山女の通り道と

謂はれて居る処である」という〔全集〕第二卷、一一三（四頁）。

さらに、Ⅲの一带については、つぎのような話がある。

〔界木峠（現遠野市と現釜石市との境）〕

・『遠野物語』第九話 駄賃稼ぎを業とする笛の名人菊池弥之助は、ある薄月夜、笛を吹きながら、あまたの仲間とともに境木峠をこえて大谷地（現釜石市）という沢にさしかかったとき、「谷の底より何者か高き声にて面白いぞと呼はる」のを聞いた〔全集〕第二卷、一七頁。

・『遠野物語』第九六話 境木峠続きの貞任山には、「昔一つ眼に一本足の怪物」がおり、旗屋の縫という狩人に退治されたが、その頃、そのあたりは一面深い林であつたのに、鉾山が盛んになり、木はおおかた伐られてしまつた〔全集〕第二卷、一〇四頁）。

〔愛宕山（現遠野市）〕

・『遠野物語』第八九話 山口（現遠野市）から柏崎（現遠野市）に行くには、「昔より山の神出づ」との伝承のある愛宕山の裾をまわるが、和野（現遠野市）の某が、ある日の夕方、そこを通りかかると、「山の上より降り来る丈高き人」がいたので、誰であろうと見ると、「顔は非常に赤く、眼は耀きて且つ如何にも驚きたる顔」で、「山の神なり」と知り、後をもみずに柏崎の村に走り着いた〔全集〕第二卷、四〇頁）。

〔笛吹峠（現遠野市と現釜石市の境）〕

・『遠野物語』第五話 遠野郷から田ノ浜や吉里吉里（ともに現大槌町）などの漁村に行くには、昔から山口村（現遠野市）より六角牛山の方に入つて笛吹峠を越えるのが距離が短く、よく利用されたが、近年、この峠を越えるとき、「山中にて必ず山男山女に出逢ふ」ということで、皆がこわがり、境木峠の方に別に新たな道を開き、和山（現釜石市）を馬継場にし、今は二里以上も遠まわりになるこちらばかりを通るようになった〔全集〕第二卷、一五（六頁）。

・『遠野物語』第九三話 和野（現遠野市）の菊池菊蔵の妻は笛吹峠の向うの橋野（現金石市）から来た者であつたが、この妻が橋野の実家に行つてゐるとき、糸蔵という男の子が病氣になつたので、昼過ぎに笛吹峠の六角牛山続きの山路の遠野分から栗橋（現金石市）分へ降りる切通しで、薄暗く感じられるようになった頃、後の方から「菊蔵」と呼ぶ者があり、ふりかえると、崖の上から「顔は赭く眼の光りかゞやける」山男と覺しき者が、「お前の子はもう死んでゐるぞ」といつた（『全集』第二巻、四二頁）。

〔六角牛山（現遠野市）〕

・『遠野物語』第六話 青笹村大字糠前（現遠野市）の長者の娘が行方不明になつていたが、同村の獵師某が、ある日、六角牛山に行つて「二人の女」に遭ひ、恐ろしくなり、鉄砲で撃とうとすると、女が「何をぢでは無いか、ぶつな」というので、よく見れば、長者の娘であつたから、「何故にこんな処に居るぞ」と聞いたたら、「或物に取られて今は其妻とな」り、「子あまた生みたれど、すべて夫が食ひ尽して一人此の如在り」といい、「人にも云ふな、お前も危いから早く帰れ」といわれ、逃げ帰つて来た（『全集』第二巻、一六頁）。

・『遠野のくさぐさ・第一束』第五四話 六角牛山のタカツキ岩のあたりに山男が住むが、「身の長け一丈五六尺、足も一本、目も一つあるのみ」で、「極めて笛の音を好む」ことから、里人は「山中に泊する時には笛を吹くことを避けよ」と戒めていた（『歴史と民俗』五〇頁）。

・『遠野物語拾遺』第一〇〇話 青笹村（現遠野市）の某が六角牛山に行き、マダの木の皮を剥いてゐると、「たけ七尺もあらうかと思ふ男」が呼びかけて来て、用途を聞くので話してやると、剥ぐのを手伝つてくれたが、「マダの木をへし折り皮を剥ぐこと、恰も常人が草を折る様であつた」。なお、この大男は餅を好み、その後、餅と交換で、マダの木の皮を某の家まで届けてくれることが長く続いた（『全集』第二巻、一〇六―七頁）。

・『遠野物語拾遺』第一〇二話 明治末頃のある年、土淵村栃内大樫（現遠野市）の大樫幸助が六角牛山に草刈に行き、「曾つて見知らぬ沢」で、「木の枝には、おびたゞしい衣類が洗濯して干してあ」り、驚いて見ていると、「一

人の大男が出て来て、其洗濯物を取集め、忽ち谷の方へ見えなくなつてしまつた」(『全集』第二卷、一〇八頁)。

・『遠野物語拾遺』第一一〇話 上郷村(現遠野市)の旗屋の縫が六角牛山に狩に行き、ある沢辺で一人の女に遭つたが、その女は遠野の村兵の厩別家の女房で、行方不明になつていた者であり、その女のいうには、「あの時自分は山男に攫はれて来て此処に棲んで居る」という。その山男は、「氣の優しい親切な男だが、極めて嫉妬深いので、そればかりが苦の種である」と、その女はいい、「今は氣仙沼の浜に魚を買ひに行つて留守だ」けれど、帰つて来ると、「決してよい事は無いから、どうぞ早く此処を立ち去つて下され」といった(『全集』第二卷、一一〇頁)。

〔五葉山(現釜石市と現氣仙郡住田町との境)〕

・『遠野物語』第七話 上郷村(現遠野市)の獵師が、栗拾いに行つたまま行方不明になつていた同村の民家の娘と五葉山の腰のあたりの岩窟のようなところで出会つたが、その女がいうには、山で「恐ろしき人」にさらわれ、「遁げて帰らんと思へど些の隙も無」しとのこと、「如何なる人」と問うと、女は「自分には並の人間に見ゆれど、たゞ丈極めて高く眼の色少し凄しと思は」れ、「子共も幾人か生みたれど、我に似ざれば我子には非ずと云ひて食ふにや殺すにや、皆何れへか持ち去りてしまふ也」ということで、獵師が「まことに我々と同じ人間かと押し返して問へ」ば、女は「衣類なども世の常なれど、たゞ眼の色少しちがへり」といい、「一年間に一度か二度、同じやうなる人四五人集り来て、何事か話を為しやがて何方へか出て行」き、「食物など外より持ち来るを見れば町へ出ることならん」という(『全集』第二卷、一六〇七頁)。

・『遠野のくさぐさ』第一束 第四七話 『遠野物語』第七話の類話で、女をさらつた山男のことを、女は「身の長け六七尺に余り、全身に荒き毛を生じ」ていたというが、女が、山男が「物調へん為に、人里に往きぬ」といったので、そのような異形では人里に出ることはできないのではないかと、獵師がいつたところ、女は「否な、人里に赴く折りには巧みに姿を変じ、身の長けも尋常の大きさに易はるなり」と苦しい説明をしている(『歴史と民俗』四六〇七頁)。

〔仙磐山（現釜石市）〕

・『遠野物語拾遺』第一〇九話 ある男が千磐ヶ岳（現釜石市の仙磐山）へ草刈に行くと、「大岩の間にぼろぼろになった着物に木の葉を綴り合わせたものを着た、山姥の様な婆様」に出会ったが、その婆様は、あるとき、夫婦喧嘩をしたあと、行方不明になり、神隠しに遭ったといわれていた遠野町（現遠野市）の某で、「山男に攫はれて来て此処に斯うして棲んで居る」といった（『全集』第二巻、一〇九―一〇頁）。

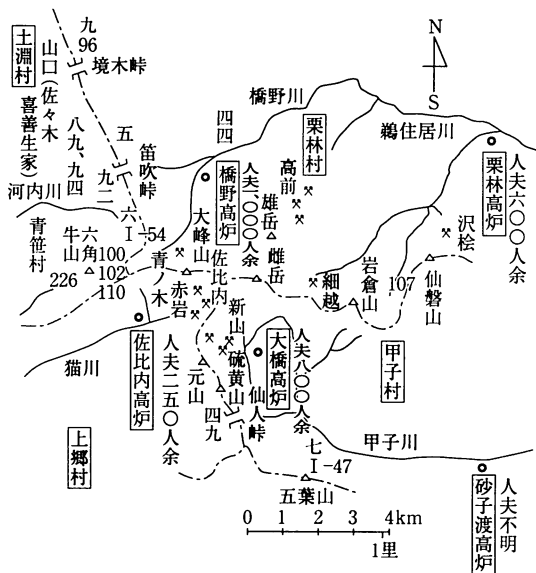
〔赤沢山（現遠野市）〕

・『遠野物語拾遺』第二二六話 青笹村字中沢の瀬内（現遠野市）に、兄弟七人、皆男ばかりの家があつたが、その総領は「江戸のあたりを流れあるいて居」て、「後に帰つて来て」から、佐比内（現遠野市）の赤沢山で、大迫金の賈金を吹き、一夜のうちに富裕になつた（『全集』第二巻、一五四頁）。

〔早瀬川河畔（現遠野市）〕

・『遠野物語』第一〇七話 上郷村（現遠野市）の早瀬川の岸に「河ぶちのうち」というのがあるが、その家の若き娘が、ある日、河原で「丈高き面朱のやうなる人」に遭い、「木の葉とか何とか」を貰つたことから、「占の術」を得た。なお、この「異人は山の神にて」、娘はその「山の神の子にな」つたといわれた（『全集』第二巻、四七頁）。

このようにみえてみると、I、II、IIIと地帯区分したなかで、とくにIIIの一带に山男・山女の出現地点が集中していることが窺える。しかも単に集中しているだけでなく、事象が相関連しながら集中しているように思える。そして、それはこの一带が釜石側からみれば、一八五六（安政六）年から建設を開始された大島高任の洋式高炉が置かれた地帯であるということにかかわっていると考えることができる。すなわち、大橋高炉・橋野高炉・佐比内高炉・砂子渡高炉・栗林高炉がそこに存在したのである。しかも、佐比内高炉は遠野側にある。また、山男が姿を変えて交易に出かけたときとされる市もIIIに近いところで、遠野・甲子（現釜石市）・釜石で開かれている。



第2図 釜石地区鉄鉱石採掘地略図と山男・山女の出現地点
 漢数字：『遠野物語』の話番号
 算用数字：『遠野物語拾遺』の話番号
 ローマ数字-算用数字：伊能嘉矩『遠野のくさぐさ・第一束』の話番号
 (森嘉兵衛『陸奥鉄産業の研究』286頁より作成)

治二一年にかけて、大橋高炉には八〇〇人余り、橋野高炉には一、〇〇〇人余り、栗林高炉には六〇〇人余りの鉱山・高炉・錢座の関係者がいた(森嘉兵衛『陸奥鉄産業の研究』法政大学出版局、一九九四年八月、二七〇頁表11)。砂子渡高炉については人数は不明であるが、いずれにしろ『遠野物語』の山男・山女などの出現地点の多くは、これら鉱山・高炉・錢座の関係者が生活していた地点であり、とても日本列島先住民の末裔の跳梁がみられるような人跡稀なところではなかった。そのことは、森が作成した釜石地区の洋式高炉の所在と鉄鉱石採掘地、すなわち鉄鉱山の所在の関係図に、Ⅲの一带における山男・山女などの出現地点を入れた第2図をみれば、一目瞭然たるものがある。

これまで『遠野物語』の山人譚がとりあげられるとき、この一帯が洋式高炉が集中的に建設された地域であることはほとんど意識されることがなかった。それは釜石側からみるという視点で欠いていたためということができる。柳田が『遠野物語』において山人譚をとりあげた背景には、その執筆当時において日本の考古学界を賑わしていた日本列島先住民論争がかかわっている。具体的には、小金井良精のアイヌ説と坪井正五郎のコロボックル説であるが、洋式高炉の存在を視野に入れてみれば、山人譚をあのような形でとりあげることはならなかったのではなからうか。

森嘉兵衛が明らかにしているところによれば、一八六八(慶応四)明治元年から一八六九(明

二 大島高任の洋式高炉の建設

洋式高炉が登場する以前の盛岡藩における製鉄はたたらを用いた奥羽流と呼ばれる砂鉄精錬であり、その中心は、北郡田名部通、九戸郡久慈通・軽米通・葛巻通・野田通、閉伊郡野田通・宮古通であった（森前掲書、六〇九頁）。砂鉄精錬で生産された鉄は刃物や鋳物（鍋・釜）などの原料としてすぐれており、砂鉄精錬は、大島高任の洋式高炉による精錬が始まるまでは、出雲なども含めて日本列島における製鉄の主流であった。

釜石地区、すなわち、閉伊郡大槌通栗林村・甲子村・橋野村（以上、現釜石市）・大槌村（現大槌町）の鉄鉱山から出る鉱石は砂鉄ではなく、岩鉄と呼ばれるものであり、要するに磁鉄鉱であった。その発見は、栗林村の栗林鉄鉱山の場合、一六六三（寛文三）年といわれ（同上、六頁）、ある程度、精錬も行なわれたようであるが、たたらによるそれでは熔解が十分でなく、稼業として発展をみることがなかった。精錬のコストも高くつき、また、当時の鉄の需要量からいっても、コストが安くてすむ砂鉄精錬で十分、間に合ったからでもある。一七二七（享保一二）年には甲子村の甲子鉄鉱山で岩鉄の存在が確認されている（同上、六頁）が、採掘は行なわれなかったようである。そして、一八一九（文政二）年には甲子村の久古の沢鉄鉱山で岩鉄が発見されたが、採掘は禁止されている（同上、七頁）。

しかし、一九世紀に入って日本列島の近海に、黒船と呼ばれる外国船が出没するようになると、海防強化の必要から鉄に対する需要が高まってくる。一つは量的に従来の砂鉄精錬による鉄の生産では需要がまかなえなくなってきたのであるが、もう一つは鉄の質の問題である。一八二五（文政八）年には無二念打払令と呼ばれる異国船打払令が出され、大砲の製造が緊急の課題とされるようになってくる。ここで鉄の質が重要な意味を持つようになる。

たしかに砂鉄精錬で生産された鉄を原料としてつくられる玉鋼は、“抜ければ玉散る氷の刃”といわれる日本刀の鍛造には不可欠なものであったが、そのような優秀な刃物用の鉄は、大砲を製造するには硬すぎ、それで製造した大砲は発射

のさいの衝撃で砲身にひびが入り、割れてしまうのである。発射によって砲身を損ねないような大砲を鑄造するには、餅鉄と呼ばれる柔らかい鉄が必要になってくる。そうしたことは、一八四〇（天保一一）年に高島秋帆が提出した『西洋砲術意見書』などから知ることができる。そして、大砲を鑄造するために、一八五〇（嘉永三）年に佐賀藩や鹿児島藩が、また、一八五三（嘉永六）年には幕府代官の江川太郎左衛門英竜（担庵）が伊豆韭山に、それぞれ反射炉を築いている。一八五三（嘉永六）年はマシュー・カルブレス・ペリーの来航した年であるが、それに触発されたかのように、攘夷論者の水戸藩主徳川斉昭は、同藩那珂湊（現那珂湊市）に反射炉を設置し、大砲鑄造を試みている。しかし、一連の反射炉では砂鉄精錬による鉄が用いられたため、期待する大砲の鑄造はできず、餅鉄の生産がどうしても必要なことが明らかに becoming。大島高任の洋式高炉は、こうした状況を背景として釜石地区の岩鉄と呼ばれる磁鉄鉱の精錬のために建設されることになる。

大島高任が、閉伊郡大槌通甲子村（現金石市）に洋式高炉としての大橋高炉の建設を計画し、岩鉄、すなわち磁鉄鉱の採掘を含め、盛岡藩の許可を得たのは、一八五六（安政三）年八月のことであった。そして、一八五七（安政四）年一月二六日に大橋高炉一座が竣工したが、中野作右衛門を出資者とする支配人経営という形をとり、一月一日に初出銃のち、一月一〇日から本格的出銃が進められる（森前掲書、二七二―三頁）。

一八五八（安政五）年五月一九日、大島は盛岡藩から閉伊郡大槌通橋野村青ノ木（現金石市）に橋野高炉の建設についての命を受け、年内に仮高炉一座の竣工をみ、藩直営ということになったが、水戸藩の反射炉が閉鎖されたため、予定の販路が失なわれて経営の危機に直面する。しかし、一八五九（安政六）年二月に仮高炉の経営を藩直営で継続することを決定する（同上、二七八―八〇頁）。

この間、大橋高炉は、一八五九（安政六）年に一たん、藩直営となるが、一八六〇（安政七）年（万延元）年には高須清次郎による支配人経営となり、一八六一（万延二）年（文久元）年には高炉二座を増設し、計三座となる（同上、二七三頁）。

また、一八五九（安政六）年には高須清次郎と遠野の商人忠平が遠野南部家の許可を得て、閉伊郡遠野通上郷村佐比内

（現遠野市）に佐比内高炉一座を建設し、兩人による支配人経営を開始する。そして、一八六〇（安政七〇〇万延元）から一八六一（万延二〇〇文久元）年にかけて高炉一座が増設される。しかし、一八六三（文久三）年には高須と忠平とが対立し、忠平のみによる支配人経営となるが、一八六七（慶応三）年には、忠平が遠野南部家からの借金を返済できず、高炉は遠野南部家に接収される（同上、三二二～三頁）。

さらに、橋野高炉では、一八六〇（安政七〇〇万延元）年二月一日に盛岡藩が仮高炉の改修を含めて高炉三座の建設を計画し、一八六一（万延二〇〇文久元）年にかけて高炉二座が築かれ、一八六三（文久三）年に仮高炉の改修となり、高炉三座がそろっている（同上、二八二頁）。

こうして大橋高炉三座、橋野高炉三座、佐比内高炉二座が稼動すると、鉄の生産が需要を上まわるようになる。海防上の必要から質量を含めて鉄の需要は増えてはいたが、洋式高炉の建設、さらには増設の結果、洋式高炉での鉄の生産量は従来の砂鉄精錬の規模に対応した市場からたちまちあふれてしまう。そこで、盛岡藩では売れ残った洋式高炉で生産された鉄を原料に鉄銭の製造を計画し、一八六五（元治二〇〇慶応元）年十二月、幕府から藩内通用銭製造の許可を得て、稗貫郡大迫通外川目村（現大迫町）に外川目銭座の開設に着手し、一八六七（慶応三）年に大橋高炉と橋野高炉で生産された鉄を原料に鉄銭を開始する（同上、三二八～九頁）。また、一八六七（慶応三）年五月には閉伊郡大槌通栗林村（現釜石市）に外川目銭座の分座としての栗林銭座を開設し、八月一日に橋野高炉の鉄を原料に鉄銭の製造を開始する（同上、三三五頁）。

なお、この間、一八六五（元治二〇〇慶応元）年には、貫洞瀬左衛門が閉伊郡大槌通甲子村（現釜石市）に砂子渡高炉を開設し、貫洞による支配人経営が行なわれたが、一八六六（慶応二）年には、松岡清蔵による支配人経営に移っている（同上、三三七頁）。

一八六八（慶応四〇〇明治元）年は明治維新の年であり、戊辰戦争が行なわれ、その過程で各洋式高炉にも大きな変化の波が押し寄せる。盛岡藩は戊辰戦争のなかで奥羽越列藩同盟に属し、薩長を中心とした西軍と戦い、敗れることになる。

“勝てば官軍負ければ賊軍”というが、明治政權を樹立した西軍は、いわゆる官軍となり、盛岡藩のように最後まで奥羽越列藩同盟に属して敗れた藩は、いわゆる賊軍となった。

そうしたなかで、一八六八（慶応四〇明治元）年四月には、佐比内高炉が岩城屋理平による支配人経営となり、つぎにみる橋野錢座の分座として佐比内錢座を併設するが、ここでは橋野錢座と同様、小野権右衛門（井筒屋）が出資し、表向きは藩直営という形がとられる（同上、三三三頁）。なお、小野は間もなく小野組を設立する。

つぎに、一八六八（慶応四〇明治元）年六月には、橋野高炉が小野の出資で外川目錢座の分座としての橋野錢座を併設するが、錢座は表向きは藩直営とされる（同上、三三三頁）。そして、同年一二月、橋野高炉の有する鉄鉱山の経営權を小野が獲得する（同上、三八九頁）。

また、一八六八（慶応四〇明治元）年八月に大橋高炉三座は一たん休業する（同上、二七三頁）。しかし、同年九月には、大橋高炉に外川文蔵の出資で、高須との共同経営による外川目錢座の分座としての大橋錢座を併設するが、錢座はやはり表向き藩直営であった（同上、二七三頁、三三〇頁）。そして、一二月には外川が大橋高炉に属する鉄山の経営權を獲得する（同上、三八九頁）。一八六九（明治二）年五月には、大橋錢座で錢の鑄造が開始される（同上、三八九頁）。

さらに、一八六八（慶応四〇明治元）年八月には、砂子渡高炉に砂子渡錢座が併設され、表向きは藩直営とされたが、同年一〇月、平野治郎兵衛（近江屋）の出資で操業を開始する（同上、三三七〜八頁）。

一八六九（明治二）年二月には、栗林錢座に高炉一座が開設され、栗林高炉となるが、一八七一（明治四）年一月に休炉となっている（同上、三三六〜七頁、三八九頁）。

このように、釜石地区に五か所一〇座の洋式高炉と五か所五座の錢座ができたわけであるが、大迫地区の外川目錢座は、一八六九（明治二）年、百姓一揆の過程で焼打ちにあい、職人が大橋錢座と橋野錢座に移って閉鎖される（同上、三二九〜三〇頁）。

いずれにせよ、遠野郷との境にあたる釜石地区のこれら洋式高炉や錢座、さらにそこに鉄鉱石を供給する鉱山などで働

く人々は多く、さきにもみたように二、五〇〇人以上が関係者として存在していたのであり、こうしたところに日本列島先住民の末裔としての山人が存在したと考える方が無理であろう。佐々木や伊能が柳田に現に生きている山人として伝えたものの実態は、要するに洋式高炉・錢座・鉾山などで働く人々であつたとみて差支えあるまい。しかも、こうした関係者には他から流入した者も多く、村落や家族を形成しない者も少なからず存在した（森前掲書、一七二～三頁、二三九～五〇頁）。しかし、そのような他から流入した人々を「異人」とみて、山人と呼ぶところに、在来の地域住民のよそ者への対応があると考えれば、きわめて興味深いものがある。そして、佐々木も伊能もこの一帯での洋式高炉・錢座・鉾山の存在を熟知しているはずの知識人であつたことも忘れてはならない。とくに、佐々木の生家のある旧土淵村山口は、第一図にみるごとく、境木峠の登り口で、橋野高炉・橋野錢座から直線距離にして五〇六キロメートルのほどのところである。

ところで、大橋高炉・橋野高炉・佐比内高炉・砂子渡高炉など、洋式高炉ではすべて過剰に生産された鉄を処理するために幕府の許可を得て錢座を開設し、鉄錢の鑄造を行ない、栗林の場合は錢座が先にでき、あとから高炉が築かれている。しかし、幕藩体制が崩壊する過程で、そこで鑄造された鉄錢は私鑄錢として扱われるようになる。あるいは、幕藩体制下においても、錢座関係者が錢座から母錢と原料鉄を持ち出して山中などで私鑄錢をつくることもあつた。それにはあとでみるように、徳川幕府の貨幣政策のもとでの錢貨の鑄造がかかわっている。したがって、私鑄錢は幕藩体制下でも存在していたのであり、そのような私鑄錢でも流通過程に入れてしまえば、公認の錢座で鑄造されたものと同様に扱われたのである。流通過程に入れるということは、要するに市で使うことである。そのことは『遠野物語』第七話や、その類話である『遠野のくさぐさ・第一束』第四七話にみられる山男にさらわれたという里の娘の話から窺うことができる。

明治政権は、一八六九（明治二）年一二月に私鑄錢の鑄造を全面的に禁止する（森前掲書、三八九頁）。そうなれば、私鑄錢は密錢として取締の対象となる。そして、一八七一（明治四）年には、当時、この地域を支配していた江刺県は密錢鑄造の大摘発に乗り出す（同上、三三四～五頁）。こうして各錢座は潰滅するが、一部の密錢鑄造者は地下に潜ることになる。禁止されたからといって密錢鑄造がただちになくなったわけではない。『遠野物語』の山人譚には、そうした歴史の

反映があることも見逃してはならない。『遠野物語拾遺』第二二六話には、佐比内の赤沢山で、大迫銭の贋金を吹いたとあるが、要するに外川目銭の密銭を吹き、富裕になった者の話はさきにも挙げておいた（『全集』第二巻、一五四頁）。あるいは、『遠野物語』第六話や第七話に、山男にさらわれたと称する里の娘が、自分の夫は生まれた子供を喰うといっているのは、密銭鑄造の現場を隠すために相手を近づけないための作り話とみることができる。東南アジアなどでも、大航海時代に奥地に行くとき食人種がいるということが流布されているが、その多くが港町の商人たちがみずからの利益を維持するために西欧人を直接奥地に行かせないための細工であつたことが文化人類学的にも確認されている（弘末雅士「東南アジアの港市国家と後背地」へ佐藤次高・岸本美緒編『市場の地域史』山川出版社、一九九九年六月／一〇六～一〇頁）。そして、『遠野物語』において子供を喰うといわれる山男も市の日には普通の姿になつて市に出て行くところがあるが、それはみずから鑄造した密銭を市で使用する事によつて流通過程に入れるためであつた。そのさい、いくら普通の姿になつたとしても、まったく見知らぬ人間がしばしば市に出入りすることは不自然なわけで、実は里の娘をさらつた山男が里の人間であつたということもありえたのである。だからこそ、その男を山中で里の者に会わせたくないということがあつたのであり、一八七一（明治四）年の江刺県による密銭大摘発以降、そうしなければならぬ事情が強まつたことは確かであろう。

山男・山女といえは、三角寛が名づけたサンカという漂泊民が連想される。サンカはしばしばその由来の古さを示す由緒書を持っている。しかし、沖浦和光によれば、サンカといわれる人々の出現は、そうした由緒書の内容にもかかわらず、どのように古くみても一七八〇年代の天明の饑饉のあとであり、しかも、その数が増大するのは、一八三〇年代の天保の饑饉の結果、離村し、漂泊を余儀なくされた者たちによるもので、もとは農民であつた人々ということである（沖浦和光「解題」へ三角寛サンカ選集・第六巻『サンカ社会の研究』現代書館、二〇〇一年四月／三七〇～九頁）。

三 幕藩体制下の貨幣政策と錢貨の鑄造

徳川幕府が実施した貨幣制度は、金・銀・銅三貨本位制と呼ばれるものである。各藩では幕府が鑄造した金貨・銀貨・錢貨を使用し、それが必要な貨幣量をまかなえないときは、手持の金貨・銀貨を担保に藩札を発行して不足を補ったが、本来、金貨・銀貨と兌換されるべき藩札が額面通りに兌換されることはなく、実質的に不換紙幣化し、信用を失墜させて行ったことはよく知られているところである。

徳川幕府は金貨・銀貨の鑄造については、改鑄・悪鑄はあつたにせよ、とにかく金座・銀座において制度的にきちんとした鑄造を行なっているが、錢貨と呼ばれる銅貨については、一六三六（寛永一三）年の寛永通宝の鑄造までは鑄造は行なわれず、永樂通宝など輸入錢を通用させ、永という貨幣称呼が行なわれていた。このあと、幕府は、一七六八（明和五）年に、もう一度、寛永通宝を発行したけれども、その前にも、また後にも各藩や商人の申請にもとづく錢座による請負鑄造に依存していたのである。その大きな理由は、銅で寛永通宝を鑄造すると、四文という額面以上のコストを要したことにあつた。つまり銅貨による錢貨は、発行すればするほど、発行主体は損をすることになったのである。

そうした状況のもとで、請負鑄造の場合、銅錢のほかに、コストが安くてすむ鉄錢の寛永通宝が領内限り通用という形で鑄造されるが、次第に鉄錢の鑄造が増加してくる。同じ寛永通宝でも真鍮錢（銅錢）と精鉄錢は四文であるのに対し、粗悪な鋳錢は一文と価値が異なつた。しかも私鑄錢も黙認され、一たん流通過程に入ってしまうと、正規に鑄造されたものと同様に通用したことから幣制の混乱が促進されることになった。明治政權が成立すると、それまで黙認されてきた私鑄錢は禁じられ、密錢として摘発の対象とされたことはすでにみたとおりである。しかし、摘発の対象とされたのは、これから鑄造されるものについてであり、すでに流通過程にあるものについては正規に鑄造されたものも私鑄錢もそのままにされたのである。要するに区別がつかないのであり、そこに新たに密錢とされたものも加わつた。東北地方太平洋側で

は、それらは三陸銭あるいは三陸通用鉋銭と呼ばれた。

明治政權は、一八七一（明治四）年五月一八日に、「三陸銭相場」は「是迄金壹両ニ付銭拾壹貫」であつたが、「向後時相場ヲ以テ通用可致事」という達を出している（『仙台市史』資料編6・近代現代2・産業経済、仙台市、二〇〇一年九月、三四四頁）。しかし、同年十二月二〇日になると、大蔵省は、「三陸通用鉋銭」での「租税其外公納物」の納入を来る一八七二（明治五）年一月から禁ずる旨を仙台県に命じ、年内に受け取つた分については県庁であずかり、その「員数詳細」だけを報告するように求めている（同上、三四四頁）。要するに、もてあましていたのである。

このあと、一八七二（明治五）年九月の太政官達で、「旧鑄銭価値」が定められたとき、「旧仙台藩并盛岡藩ニ而鑄造之鑄銭鑄銭ト唱候壹文銭者、金五拾銭ニ付八千枚」、「四文銭与唱候分者、四千枚ヲ以交換取引」することが定められているが、「二種或ハ兩種ヲ併スルモ一口之取遣、新貨五拾銭ノ高ヲ限ルヘク、之ヲ越レハ拒ムノ權アルヘシ」ということになっている（同上、三四八〜九頁）。ここで旧仙台藩にて鑄造とあるのは、石巻錢座や栗木錢座のものであるが、旧盛岡藩にてとあるのが、さきにみた外川目錢座・栗林錢座・橋野錢座・佐比内錢座・砂子渡錢座・大橋錢座で鑄造されたものと、その周辺での私鑄銭とみることができる。

なお、これら三陸銭・三陸通用鉋銭の処理に関して、一八七六（明治九）年六月二八日に宮城県（マミ）の石巻およびその周辺地域の戸長・副戸長が宮城県に対し、「岩手県管下之儀者、右鑄銭多之故か、方今頻リニ北上川筋より運般相成、当石巻辺者右鑄銭ノミニテ融通之上、甚不便宜為」として、一八七二（明治五）年九月の太政官達による交換比率を、「金五拾銭ニ付、右壹文銭者壹万枚、四文銭者五千枚」に変更してほしいと申請した（同上、三四八頁）。宮城県では、これを受け、同年九月九日、この交換比率を申請どおり認めてくれるように大蔵省に上申するとともに、「鑄銭関係ノ諸簿記等モ無之、明瞭ナラス候得共」、いろいろ勘案するに、「大約新貨式拾八万円ニ当ルノ数ヲ鑄造」したと推定したうえで、「現ニ民間ニ在ル物ヲ概算スルニ、新貨三万円ヲ超ユヘカラ」ずといっている（同上、三四九〜五〇頁）。

このように、大島高任の建設した洋式高炉に併設された錢座やその周辺で鑄造された鉄銭は仙台藩↓宮城県に持ちこま

れ、旧貨整理の支障となつてゐることと同じことは、おそらく江刺県→岩手県における旧貨整理においてもみられたことであらう。

四 官行釜石鉱山から田中製鉄所の成立まで

一八七二（明治五）年五月、前年休炉になつてゐた栗林高炉が再開される（森前掲書、三三七頁）。また、同年七月、工部省の備鉱山師長のイギリス人J・G・ゴットフレードが釜石地区の鉱山調査に訪れる（同上、三八八頁）。同年九月には橋野高炉に小野組が出資し、一月には大橋高炉において小野権十郎が山元となり、高須と外川による共同経営が継続されている（同上、三七〇頁）。

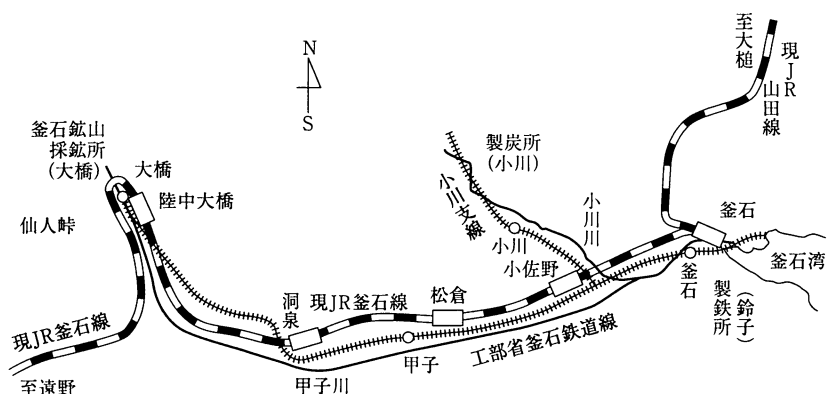
一八七三（明治六）年七月には、大橋高炉・橋野高炉・佐比内高炉・栗林高炉の四高炉が官行指令を受ける（同上、三七〇頁）。そして、一八七四（明治七）年三月、工部省は一帯を釜石鉱山として官行することを決定するが、これらの指令や決定が出されるにあつて、さきに調査を行なつたゴットフレードの献策が大いに物をいつたようである（日本国有鉄道仙台駐在理事室編『ものがたり東北本線史』へ以下、『本線史』と略記）財団法人鉄道弘済会東北支部、一九七一年四月、五頁）。五月二一日に工部省釜山寮釜石支所が設置され、八月一〇日、大橋高炉において官行釜石鉱山の起工式が挙行されている（森前掲書、三七〇頁）。九月には、ゴットフレードが工部省鉄道寮備建設技師のイギリス人チャールズ・シェパードを同行して釜石を訪れ、鉄道設計画を打ち出している（『本線史』五〇六頁）が、一月二九日には、橋野高炉・佐比内高炉・栗林高炉は官行から除外され、官行釜石鉱山の事業は大橋高炉に集中されることになる（森前掲書、三七〇頁）。そして、一八七五（明治八）年五月には、工部省鉄道寮備建設助役のイギリス人G・バーゼルが鉱山寮土木技師として釜石を訪れ、鉄道建設のための測量に着手し、八月から工部省釜石鉄道線の建設を開始する（『本線史』六頁）。

こうした一連の現地調査により採鉱所を甲子村大橋に置き、製鉄所は釜石港に面した釜石村鈴子に、さらに燃料の木炭

を焼く製炭所を甲子村小川に置くことになり、その間に支線を含めた鉄道が敷かれることになったが（同上、六頁）、その位置関係は第3図によられたい。そして、このような過程において、ゴットフレー以下、当時、釜石を訪れた外国人の姿が『遠野物語』の山人譚に影をおとしていることは疑うべくもないところである。したがって、これら山人譚は、日本列島先住民の末裔の存在ではなく、むしろ、日本における「文明開化」の過程の一端を示すものと理解すべきであろう。なお、当時、釜石に在勤したさきにとりあげた以外の外国人について、『釜石市史』史料編四（釜石市、一九六三年五月）から第1表のような一覧をつくることができる。すべて同時に釜石にいたわけではないが、この時代として一七人というのは大変な数の外国人ということができよう。釜石での在勤期間は人によって差があるが、一七人中、一年未満が二人、一年以上二年未満が四人、三年以上三年未満が五人、三年以上四年未満が四人、四年以上五年までが二人であり、彼らが例のⅢの一带を歩き、遠野側の人々の視野に入っていることも考えられる。『遠野物語』第八九話に登場する「山の神」など、こうした外国人の風貌を思わせるものがある。なお、『遠野物語』第五話の、近年笛吹峠において山男・山女に遭遇するようになったので、遠まわりをして境木峠を通るようになったということも、ただちに外国人との遭遇とは結びつかないとしても、大島高任の洋式高炉の開設と無縁のことではあるまい。

ところで、一八七八（明治二二）年に、イギリス、マンチエスターのシャープ・スチュアート社製の機関車三両が釜石港に到着する（『本線史』八頁）。そして、一八八〇（明治二三）年二月一七日、工部省釜石鉄道線全長一六マイルあまりの工事が第3図のような路線で完成するが、早速、試運転を兼ねて製鉄所用の鉾石や鉾山用の資材運搬を行ない、一八八二（明治一五）年三月一四日、旅客を扱う営業運転を開始する（同上、六九頁）。

この間、一八八〇（明治二三）年九月に鉾山の諸設備が完成し、九月一〇日に製鉄所の高炉の火入れが行なわれ、一日約七トンの鉄が生産できるようになった（同上、九頁）。しかし、間もなく高炉に不具合が生じ、出鉄が思うようにならなかったため、一八八二（明治一五）年十二月一八日に工部省は官行釜石鉾山の廃止を決定し、一八八三（明治一六）年二月に完全に操業を止め、六月一〇日限りで工部省鉾山局釜石分局を廃止している（同上、一〇一頁）。この結果、工部省



第3図 工部省釜石鉄道路線図 (『ものがたり東北本線史』7頁より作成)

第1表 工部省釜石関係傭外国人各務担当表

国籍	氏 名	職種	月給(円)	在勤期間
ドイツ	ルイス・ヒャンジー	鉱山兼製鉄師	350,000	1874.3—77.2
イギリス	ヂーボルセン	土木師	375.000	1875.5 鉄道局より雇 替—80.3
イギリス	ウィリブラム・シェーヒー・カスラー	建築師	375,000	1876.2—78.1
イギリス	アレキサントル・スミッスフヒールド	建築師	156,000	1876.5—79.1
イギリス	トーマス・フラットレー	器械師	190,000	1876.5—81.5
イギリス	トーマス・ハーリン	器械職工長	195,200	1876.8—78.2 (1ヶ月英金40ポンド の約定、1ポンド4円 88銭割)
イギリス	ベルヘルター・プリスター	汽車組立師	日当 4,500	1874.4 鉄道局より転 雇—81.8
イギリス	セームス・ニュートン	施鉄工	日当 4,000	1879.9 鉄道局より転 雇—82.3
イギリス	ジョン・ホルトソ	鋳鉄師	225,000	1879.9—83.2
イギリス	ウィリアム・ワーレス	鋳鉄炉管守兼 瓦斯技手	205,000	1879.4—83.2
イギリス	リチャート・レスター	器械師	270,833	1881.5—84.5
イギリス	ウキルリヤム・エムアットウエル	煉鉄師	175,000	1881.5—84.5
ドイツ	ウキルヘルム・カラス	鋳鉄師	300,000	1881.6—83.6
ドイツ	エフ・テッシンリン	千草丸運転手	100,000	1881.8—81.11
イギリス	ジェームス・スコット	機械師	300,000	1882.3—83.2
イギリス	ジョーセフ・トーマス	製鉄師	225,000	1882.6—83.4
イギリス	ジョーセフ・カスプルトリン	鋳鉄師補助	150,000	1882.8—83.9

(『釜石市史』史料編四、345-8頁より作成)

第2表 永出永寿坊徳勸による日英対照語集

日本語	英語	日本語	英語	日本語	英語	日本語	英語
天保百文	わん天保	星	すたある	母	もうぎ	犬	どうけ
天保貳百文	とう天保	雲	くろうど	女房	わいふ	馬	ほゝす
天保三百文	つれい天保	雨	れえん	爺さん	けれんと ふあうさ	卵	えぎす
天保四百文	ほふ天保	風	ういと	婆さん	けれんと もふざ	鳥	くろう
天保五百文	ふあい天保	雷	そんとる	男子	をそん	笑う	らふ
天保六百文	せぎす天保	山	むえんてい	女子	とうた	休日	どんたく
天保七百文	せぶん天保	川	りいうる	大きい	らち	昨日	やしとでい
天保八百文	ゑい天保	火	ふはや	小さい	すもる	今日	どてい
天保九百文	ない天保	水	おわた	少し	りとる	昼	でい
天保老貫文	てん天保	仏	ふたん	旅館	ほでいる はうす	朝	もうねん
金壹歩	わん壹分	寺	ちゃあち	酒	わいん	夜	ないた
金貳朱	はふ壹分	舟	ぼうと	魚	ふえし	夕方	とわいらいと
金壹朱	こあらい壹分	家	はうと	米	らいす	起きる	けたつふ
金貳分	とう壹分	金	がある	煙管	ばいふ	寝る	すいつぶ
金壹両	ほふ壹分	男	べるそめん	雀	すはろう	馬鹿	ふうる
日	ぞん	女	をふめん	猫	けつと	刃物	ないふ
月	むん	亭主	ました	ただし、英語でないものもいくつかある。			

〔『釜石市史』史料編四、104～7頁より作成〕

釜石鉄道も廃線となり、一八八四（明治一七）年一〇月一〇日にレール・車輛の一切が大阪堺間鉄道会社（のち、阪堺鉄道会社、現南海電気鉄道株式会社）に払い下げられている（同上、一一頁）。この払い下げについては、宇田正「官営釜石鉱山鉄道資材の払下げと阪堺鉄道会社の成立―『工部省時代』の終焉―」（『追手門経済論集』第一巻第二号、追手門学院大学経済学会、一九六七年三月）に詳しい。

これまでみてきたように、官行釜石鉱山と工部省釜石鉄道線は、短期間で廃止されたとはいえ、当時の日本としては最先端の技術によつて釜石における開発が行なわれていたのであり、遠野側からみて、六角牛山から東、仙磐山にかけての一带は決して人跡未踏の深山幽谷ではなかったたのである。

『釜石市史』史料編四には、官行釜石鉱山時代の、しかも新貨ではなく、旧貨が行なわれた段階に書かれたと推定できる「永出永寿坊徳勸手記」のなかに、「（異人語早学問也）」という日英対照語集なるものが載っているが（『釜石市史』史料編四、一〇四～七頁）、それを整理したものが第2表である。永寿坊という修験と覚しき八二歳の老人の外国人の使うことばに関心を示す姿勢は興味深いものがある。これが当時の釜石側を象徴するものといえよう。

さらに、同史料編には、横浜で発行されていた“The Japan Weekly Mail”の一八七五（明治八）年八月二八日号に載った、‘Kanaishi’という記事の訳文を板沢武雄『釜石雑考』から引用し、「英字新聞に見えた明治八年の釜石」と題して、釜石 The pot stone, or stonepot とは日本本州の北東海岸、山田と仙台との中間に位置する寒村のことである。明媚な岩礁の相迫つて湾をなすところ、湾内の水は磨いた鏡のように静かにきらめき、水底には鬱蒼たる海岸が透映し、その水の深いこと好箇の港湾である。然し惜しい哉、（略）この波静かな良港も、その港口に二つの暗礁の横わるありて、船舶が安全にその所を通過することの出来ない憾みがある。

それはそうと、この「石の釜」という地名は何から起つたのだろう。この台所に關係する奇異な地名も、恐らくは、この地より約十二哩を距る大橋附近一帯の山嶺から産する鉄鉱に關係ある微妙な観測に因るのではなからうか。（略）

（中略）

全くこんな良い土地を見たことがない。（略）塵埃多い都会に住み、心身の休息を求める人達に、釜石ほどよい土地を見出すことは出来ないであろう。然し読者諸君、もし休息の地をこのどこかに見え出そうと欲するの士は急ぎ給え。この港に近い谷は既に人間で一杯である。樵夫の斧は建築用材のきり出しに忙しい。鉄道用の土堤は今人間の手の大きさに及ばないが、やがて鉱石を運ぶ貨車がとゞろき、鉱石の壁を平地に築き上げるであろう。

（中略）

現在人口三九五五人、戸数七九二戸、神社一五、寺院二、校長一人、生徒一三五名、ゲンシンの一族が最も多い。（略）釜石以上に絵画的に位置する村を考えることは困難である。周囲に高く聳ゆる山の麓に位置する人家、緑の並木に境される径、村の中心原始林からなる一つの山の裾の上に村の長戸長村井儀兵衛の家がある。日本の山は彼等の住宅によく選定するところであるが、神秘的なことが物語られている。そこに住む目の大きいメランコリーな子供等が、真夜中に声を聞いたという怪談や、満月に見たこの世の者ではない怪物の話など珍らしくない。

この町の家作りは堅牢でよい作りである。どつしりと建てられ、時代を経て煤けている建物が新らしい近代的な建物と粗

野な対称(タウ)のうちに存在している。しかし近代的な建物は少ないのである。屋根は滑らかな川石で蔽われている。あたかもその石が川原にあつた時と同じように密におかれている。これは風を防ぐためであらうか。そのみではない。こゝの人達は鉄の産地に住みながら、釘を用いないですます簡易な葺き方をするのである。あゝ地下には豊富な鉄鉱があるのに。

このようにこの村が絵のようにロマンチックに位置しているのである。しかし魚のために穢されている。魚は木の枝にも、大通りにも、裏通りにも、家の中にも、魚が一ぱいである。空にも魚、到るところ魚々である。漁民は住民の唯一の生業である。米は山を越して遠野から供給されている。彼等の主なる食物は南部鮫 *nanbo-same* (タ) である。沖で切つて頭と尻尾をもつて来ないのである。釜石の住民は多くの世紀の間、他から隔絶して暮して来たから、お互に密接な結合をなし、彼等の風俗習慣を保持している。丈が高くて恰好がよく、膚が白くて、男女共に二十位までは容貌はよいが、その頃から変る。彼等は喧嘩することを大そう好む。市日には街道によく人だかりして争っている。釜石の習慣として、立派な服装をした人と往き会ふと、ひいていた馬を道の側によけてその人が通るまで待つている。返事はハイまたはハイハイという。猿の話、章魚 *Octopus* の話など説話に富んでいる。

釜石は北緯三九度一六分三〇秒、東經一四一度五二分五〇秒、偏差四度十分に位置する。釜石は今や磁鉄鉱が発見されて、それがため政府にとって非常に重要な土地となった(同上、三二三〜六頁。略・中略―岩本)。

という形で、釜石鉱山の官行決定後、工部省釜石鉄道線の建設工事が開始された当時の釜石の状況をとりあげている。このなかで、日本人が住宅を建てることを好む山、おそらく小高い丘地ということであらうが、そこに住む子供たちの伝える、真夜中に声を聞くという怪談や満月にみた怪物の話というのも、日本列島のどこでも聞くことができるものであり、ことさら山人を意識させるものではない。ここでいわれる山の方向というのは仙磐山から六角牛山にかけての遠野郷に向けてのものであらう。また、猿は、これまた遠野郷との境にある六角牛山や仙人峠でみられることが、『遠野物語』第四話から第四九話にあるとおりである(『全集』二七〜八頁)。なお、ここに出てくる釜石の人の食べる主な魚とされる南部鮫であるが、これは長崎俵物として中国に輸出される干鮑・煎海胤と並ぶ鱈鱈の原料になるものであり、鱈鱈をとつた

あとの魚体を食料としたのであろう。そのさい、沖で頭と尻尾を切ってもって来ないというのは、釣りあげた鮫は危険であるため、釣り上げると同時に頭を切って殺したのであろうが、そのとき同時に尻尾とともに鱈も収獲していたはずである。盛岡藩や仙台藩の太平洋岸の漁村がこれら三品の主要産地であったことは、小川国治『江戸幕府輸出海産物の研究―俵物の生産と集荷機構―』（吉川弘文館、一九七三年二月、二五六―八二頁）、荒居英治『近世海産物経済史の研究』（名著出版、一九八八年二月、二三五―六二頁）をみれば明らかであり、現在でも宮城県気仙沼市ではフカヒレ食品を特産品としている。

ところで一八八三（明治一六）年二月に最終的に廃止された官行釜石鉱山のあとは、一八八五（明治一八）年に静岡県出身の初代田中長兵衛が借り受け、新たに小型高炉を設置して、一八八六（明治一九）年九月にともかく出銃に成功している（飯田賢一『日本鉄鋼技術史』東洋経済新報社、一九七九年四月、一二二頁）。そこで田中は、一八八七（明治二〇）年二月に一切の施設の払い下げを申請し、同年七月、その払い下げを受け、釜石鉱山田中製鉄所と称し、一八八八（明治二一）年にかけて高炉を増設する（同上、一二〇―一頁）。このあと、田中はさまざまな努力を重ねながら、一八九四（明治二七）年十一月に日本最初のコークス銃の製造技術を開発する（同上、一三二頁）。この間、一八七三（明治六）年七月に官行指令を受けながら、一八七四（明治七）年一月二十九日に官行から除外されていた橋野高炉・佐比内高炉・栗林高炉のうち、橋野高炉のみは、瀬川清兵衛と渋谷善兵衛の手で細々とした経営が続けられていたが、一八九四（明治二七）年に釜石鉱山田中製鉄所によって買収され、その経営に移っている（森前掲書、一七三―四頁）。

初代田中長兵衛は、みずからの開発した技術にもとづき経営に努力するが、十分な利益をあげるまでにいたらぬうちに、一九〇一（明治三四）年にこの世を去る。そして、事業は二代目田中長兵衛に引き継がれるが、二代目は、一九〇三（明治三六）年に鉄鋼一貫生産に踏み切り、経営をとりあえず軌道に乗せている（飯田前掲書、二六一頁）。『遠野物語』についての原話が佐々木から柳田に伝えられ、上梓にいたるまでの時期に、釜石鉱山田中製鉄所は、このような状況にあったのであり、佐々木も伊能も、その間の事情を知らなかったはずはない。とくに、伊能は、当時、『遠野新聞』の主筆をつと

めるジャーナリストであった。

二代目田中長兵衛の経営する釜石鉱山は、第一次世界大戦中の好況で業績を伸ばし、一九一七（大正六）年三月に田中鉱山株式会社となるが、大戦後の不況をもちこたえることができず、一九二四（大正一三）年には三井鉱山株式会社の傘下に入り、その子会社である釜石鉱山株式会社の経営に移っている（同上、二六一頁）。

五 むすびにかえて

これまで第1図のⅢの1帯における大島高任による洋式高炉の開設以降のさまざまな事態の進行が『遠野物語』の山人譚に影を落していることをみてきたが、最後に第1図のⅡの1帯、すなわち白見山をめぐる1帯での『遠野物語』の山人譚について触れておこう。この1帯の遠野郷と接しているところは、現在の上閉伊郡大槌町である。そして、この町の金沢地区というのは、奥羽藤原氏の時代にまでさかのぼる砂金生産の伝承を有するところである。金沢という地名そのものが、それに由来するものであるが、この1帯でみられる山人なるものは、砂金や金鉱を探る鉱山師であった公算が大きい（『大槌町史』下巻、大槌町役場、一九八四年二月、一二七三～九五頁）。鉱山民俗学を提唱する内藤正敏は、いわゆるヤマ師と呼ばれた鉱山師が第二次世界大戦前までこの1帯で多くみられたという地域の人々の話を採録している（内藤正敏『遠野物語の原風景』筑摩書房、一九九四年一〇月、二二一～四五頁）。また、金沢地区では一八九一（明治二四）年から一九二六（大正一五）年にかけて四三件の金山の試掘などが行なわれたことがわかっている（前掲『大槌町史』下巻、一二八九～九二頁所載の「金沢村内金山出願等一覧」）。その意味でⅢの1帯ともども遠野側にしか山人譚が存在しないのは、柳田にそのような話を提供した佐々木や伊能の作為とみるほかはない。なお、金山地区を通る金沢街道というのは、近世において大槌湾で獲れた魚を内陸に運ぶとき、通過するにあたって口銭を必要とする大槌の市を避ける脇道として開かれたものであり、そうした荷物の輸送のためにマタギが活躍したことは海産物流通関係の史料から確認することができる（岩本由輝『近世

漁村共同体の変遷過程―商品経済の進展と村落共同体―」塙書房、一九七〇年一月、一八八頁）。史料にはマタギは又木と表記されているが、大槌の市では荷物が市を通らないことを防止するため、藩に願い出て何回も金沢街道を切り崩して通れないようにしている。しかし、この脇道はすぐマタギたちの手で復旧されている。そのマタギにも山人の影を感じとれることはできるが、彼らは要するに金沢地区の住民であり、季節的に狩に従事しながら、駄送など輸送にたずさわっている人々であった。

さらに、IIの一帯の遠野側は一八七〇（明治三）年三月から一八七二（明治五）年まで牛馬の牧場として山奈宗真によって開かれていたところであり（田面木貞夫『遠野の生んだ先覚者・山奈宗真』遠野市教育文化振興団、一九八六年三月、一三〇六頁）、また、『遠野物語』上梓のしばらく前に燐寸の軸木工場が建てられたところであるが、その牧場や工場のあったところが、佐々木によれば、山男や山女、山の怪などの跳梁する場所として扱われていたことも知っておく必要がある。

（東北学院大学 日本経済史）